

Trial & Error トリアル・アンド・エラー No.61

試 行 錯 誤



特集 ソマリアだより

難民移送 マグドールからジャボレへ	2
政治難民の流入	4
ラマダーンがやってきた	5
ルシナの木陰で	6
ソマリアだより	8
わたしたちもあのように生きたい	10
JVC 第4回会員総会	12
「主要 NGO 諮問グループ会議」に参加して	15
同じ乗物に乗れない人々	16

難民移送



マグドールからジャボレへ



T/E 55号でお伝えしたとおり、84年から85年にかけて約5万人にもものぼるエチオピア飢餓難民(新難民)がソマリアに流入した。ルークの人口があまりにもふくれあがったため、彼らはジャボレ新キャンプに移されることになった。難民移送は85年12月から86年の1月までに一部行われ、JVCは難民を送り出す手配からジャボレの受け入れにまで参加することになった。

延び延びになった移送

12月14日夕刻、ルークのマグドール・トランジットセンターより運ばれてきた590人ほどの難民がプロブルテのジャボレ難民キャンプに到着する。難民移送の方針が政府より打ち出されたのが、今年の初め。その後数回場所が変更され、最終的にプロブルテに決まったのが8月、JVCが医療施設建設に取り組み出したのがその翌月。ずいぶんとのびのびとなった移送も今月ようやく実行に移された。

ルークで送り出す手配、700キロを移送する手配、プロブルテで受け入れる手配と3チームにJVCはすべて参加し、UNHCR、ELU/CARE、RHU等関係各団体と合同プログラムを組んでの移送だが、第一回目ということでスムーズには運ばなかった。

それでもプロブルテに関していえば、送られてきたのがまだ小人数で、健康な者のみだったので大した混乱もなく、難民到着翌日より開始したJVC/RHU緊急医療援助も実に穏やかに進められている。現在テントで行っているクリニックに来る患者も、ほとんどが軽い頭痛を訴える程度である。

15日より難民たちはUNHCRの「整然とした家並をつくる」という方針を無視して、思い思いにアッカル(丸い家屋)を建て始めた。HCRからの報告書にはこうは書かれないだろうが、それでいいのだと思いつつキャンプを歩き回っている。オガデンを追われ、今また上からの決定で見知らぬ土地に放りこまれた人々だ。自分の小屋ぐらい好きに建ててもいいじゃないか。

ただ、道とトイレのスペースだけは必ず確保しなければならないので、JVCが自ら指導するとともに、キャンプ・コマンダーにも強く要請している。



少したつと難民たちは予想通り木を切り始めた。ジャボレとは「小さな薪のたくさんある所」という意味である。難民が増えるにつれ、このジャボレが減っていくことは火を見るより明らかで、この地名を変更しなければならないかも知れない。JVCとしては植林のプログラムを早急に始めたいと考えている。

現在のところ、水はSRWU (Southern Refugee Water Unit)、食糧はSRC (Saudi RC・サウジ赤三日月社)、医療はRHU/JVCが担当し、これといった問題はない。十分に準備した上での受け入れなのである。ただ何事も最初が肝腎であり、今少しづつ難民たちに簡単な衛生指導を行っている。(85年12月末 掛村 均)

難民移送トラック同乗記

12月13日、予定の半数以下であるが、13台のトラックがマグドールの人々をジャボレに運んだ。コンボイの第1陣である。以下はその記録である。

- 4:00 a.m. JVCコンパウンドを出発
- 4:30 マグドールに着く、(途中パンクのため到着が遅れた) この時もう既にマグドールの人々が乗車名簿も作らないうちにトラックに乗りこんでいて、NRC、UNHCRの職員が彼らを降ろしていた。
- 5:00 乗車名簿の作成を開始する。

食糧クーポンを提示してもらい、乗車名簿に家長の名とその場に実際にいた家族の数(家長も含む)を記した上で、持っているクーポンをもらう。それからトラックに乗せるのだが、1台のトラックに34人から55人が乗った。13台の合計572人。

7:00

出発。

先頭にUNHCRの無線車、次いでNRCの車、空荷のトラック2台(緊急用)を含む15台のトラック、2人の看護師の乗り込んだRHUの車、そして最後尾にUNHCRの無線車がコンボイを作る。JVCからは榎田、千田、石井が最後尾の車に乗った。

7:30

ELU/CAREが食糧配給する。

乗車名簿に基づき、一台に乗っている家族数だけのフタ付ポリバケツが用意された。その中にコップ1個(アルミ製)、魚缶2個、パン8~10個を入れ、1つずつ家長に渡す。ナツメヤシの実はトラック1台につき1箱が割り当てされた。

9:00

出発。

9:40

4キロほど走った時点でトイレット・タイム。

10:00

再び出発。

11:30

No.13の車がスベア・タイヤを落とす。

12:00

暑さが厳しくなり、トラックの上の人々がぐったりとしてきた。

1:45 p.m.

No.2の車がパンク。スベア・タイヤを積んだ車が先に行ってしまったため、その車が戻るのを待つ。

2:30

休憩。

3:55

出発。休憩は1時間の予定だったが、トイレに行ったりお茶を飲んだりする者が多く、時間通りにはいかなかった。

5:35

バイドアを通過。5時間半の遅れ。

6:50

バイドア方面に向かう一般車が交通事故を起こし、全員が流血していた。RHU職員と石井が応急処置を行う。

9:40

車酔いしたのか、1人の婦人が気分が悪くなったと訴える。処置してから空トラックの助手席に乗せる。

10:15

野営地点着。(出発より332キロ地点)
5時間15分の遅れ。難民の人々も疲れきっていたので、混乱するのではと予想した夕食(米、スープ、肉、茶、ミネラル・ウォーター)も落ちついたものだった。

移送中ドライバーがタバコを買ったり、お茶を飲みに行くなどしたため、コンボイは何度もストップし、大幅に時間をとられてしまった。翌日も同じような調子だったが、舗装道路走行であったためジャボレには約1時間の遅れで、午後2時半に到着した。

早速、難民の新登録が始まる。登録されるとその場でクーポンをもらい、すぐにSRCの食糧配給所で食糧を受け取った。1人当たり砂糖、オイル、ミルクがそれぞれ缶1杯、米は缶5杯である。これは10日分にあたる。

クリニックはまだ完成されていなかったため、このコンボイとともにジャボレに赴任した前マグドールキャンプ・メディカル・オフィサーのモハメッド・カリフ氏とジャララクシから赴任した3人の看護師がテントを使い治療活動を行っていた。今のところ重症例は見うけられない。

いずれにせよ、人々が無事運ばれるよう今後も努力したい。

—— 追 記

第2コンボイが12月27日に出た。28台のトラックで1500人を運んだ。(この回からUNHCRは移送に伴走しなくなった)第2陣は第1陣の3倍規模で、しかも受け入れ側には詳細が伝えられなかったため混乱が生じた。

人々は登録を待たずにトラックに殺到し、JVCが現場に着いた時はものすごい数の人々が乗車していた。(1:30 a.m.)後にやってきたNRCが人々を降ろし登録を始めた。1台に50~60人が乗ったが、それでも乗れない人が多く、それらの人々はトレーラーの上にまで乗ってしまった。乗車名簿に登録されなければジャボレで食糧カードをもらうことはできないのだが。結局彼らはあとで降ろされた。

第2陣の大半はマグドールⅡの人々で占められた。うわさによると、今回運ばれる予定だったマグドールⅠのセクション2からはわずかに12家族しか行かなかったという。(榎田秀樹)

第3陣の難民移送は1月27日に行われ、1285人がジャボレに移された。これ以降マグドールでコレラが発生したのと、ソマリア北部で新たな難民が流入し、トラックも人手もそちらに取られたため、難民移送は停止されたままである。ただし7月には再開される見通しがたった。(編集部)

政治難民の流入

ソマリア北部国境、タグ・ワジャーレ難民キャンプで――

ジャーナリスト 佐倉 洋

雨期に入り、腰高の灌木の散生したエチオピアへ広がる大地は、一面緑の絨毯に覆れていた。朝など霞が地の果てまで帯の層に広がり、まるでこの緑の平原全体が地上から浮き上がっているようにも見えた。時々ヒバリのような鳥の声が聞こえ、まことに静かな光景だった。しかし今年になってここにエチオピア難民の流入が急増した。ほとんどがオロモ族の人々である。毎日500～1000人を数え、ついに4月末には7万人を超えた(公式発表)。彼らはこの大自然の向こうからまるで湧くようにやってきたのだ。いったい何がエチオピアで起こっているのか。

このタグ・ワジャーレ新難民キャンプ(P2の地図参照)には、約4000のテントが32のセクションで張ってある。昼間は人の群れでごった返していた。センターの食糧倉庫の前で配給を待つ人々。キャンプ内にある7つの水タンクの前で洗濯する人々。そしてキャンプのはずれに赤十字とフランスのMSF(国境なき医療団)の病院の大テント。それにUNHCRのテント。そして新着難民たちは配給登録を受けるために一日中座りこんでいる。政府のスタッフたちは椅子と机を持ち出し、作業を進めている。しかし、彼らにはテントや毛布の支給がまだない。灌木の間にしゃがみこんで雨露をしのいでいる状態。この地域は雨が降るとセーターを着こんでも寒いぐらいだ。肺炎などの病気になる怖れは十分にある。

この新着難民のひとり、ソフィアさん(20歳位)は、2週間前に着いたばかりである。

「19日間歩いてきました。夫と2人です。ジジガ(ハラルゲ州)近くのグルソムという街から来まし



た。昨年の9月ごろからでした。銃声が毎日しました。学校も閉鎖され、家を壊されました。そのあとは森の中に4カ月もいました。そして新しい村を作るといので、昼間は耕作、夜は家作りの労働をやらされました……」という。

イサ・ハッサンさん(30歳位)は、

「ジジガ近くのラフェイスという街にいました。昨年9月の革命記念日の日に人々は街の広場にいました。すると100メートルぐらい離れたところで爆発がありました。今度は兵隊たちが人々に発砲し始めました。みな森の中へ逃げました。1週間ぐらいは森の中にいました。帰ってくると、新しい村を作るといので家を壊せと命ぜられました。500軒ぐらいは壊したでしょうか。私は父が殺されたので妹たちを連れて逃げました」

エチオピアでは昨年9月ごろから住民のキャンプへの収容政策が始ったようだ。農民の組織化、そして家畜の国有化、最後に集団移住と続いたようだ。しかしこれには反政府解放戦線(オロモ解放戦線DLF)への対策があるようだ。ゲリラ対策上とられる常套手段である。かつてケニアのマウマウ対策で英国がとり、ウガンダのオボテ政権がルウエロ三角地帯でとった政策である。ゲリラと住民を隔離し、ゲリラへの協力を離れさせようというのである。

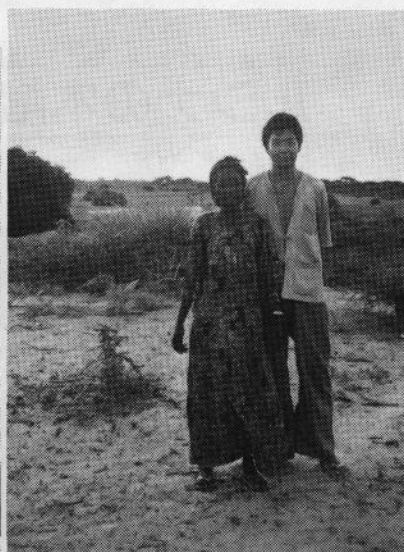
ある若者は、

「解決策ですか。そんなことは今のエチオピアでは夢ですよ」と言う。

別のおかみさんは、

「銃があれば銃を取ります。私は死ぬまで戦います。けれどここに銃はありません。神と世界だけが頼りです。世界は私たちを助けてくれるのでしょうか」。そう言った。

世界は彼らの声にどう答えるのだろうか。難民の流入は今も続いている。まだ村の半数の人々は逃亡のチャンスを待っているのだという。今後続く難民のため、土地の問題もテントの問題も片づいていない。私はうらめしいように、エチオピアに広がる美しい緑の大地を見ていた。



6月の8日、夜中にソマリア・スタッフの1人が私の家に来て来た。

「ラマダーンが始まったノ」

「またか……」。

私自身ソマリアで迎える断食月はこれで3度目であるがいつもこの戒律には首を傾けてしまう。イスラム教には5つの守るべき柱がある。1つにアッラーを、唯一絶対の神を信じること。2つに毎日の礼拝、3つに巡礼、4に貧しき者への慈悲、そして最後がラマダーン(ソマリ語では‘ソソ’:断食)である。年に一度このラマダーン期に教徒たちは日の出より日没まで一切ものを口にしない。

ムスリム(イスラム教徒)でない私はもちろん煙草も吸うし、飯も食う。それを難民たちにとがめられることもある。どうせ私は満腹感こそ人生最大の喜びとする非宗教的、非哲学的人間なのだ(その意味でわが学生時代の下宿生活は悲しみにあふれていたなあ……)。

彼らが静かにその戒律を守っているならば、それはそれで感心もするのだが、彼らのラマダーンは毎日毎日「腹減った。腹減った」と繰り返し、日没と同時に夜中までいつもより多くの食事を口の中に放り込み、翌朝「食べ過ぎた。眠たい」とボヤク日々であり、私などそれならやめればいじゃないかと簡単に思ってしまう。

ところが彼らは頑なに断食を続ける。

私は元来物事に対しひねた見方をする癖があるのだが、この場もその癖を発揮させてもらおうと、彼らにとって宗教的戒律の順守はその確固たる信条故でなく、政教分離のなされぬ社会においてその構成メンバーたりうる条件を満たすための手段であるようだ。

つまり、イスラム教の教えを守らぬ人物は周囲から認められず、ラマダーン期に飯を食うと白眼視されるのである。アフリカ人は宗教なくして生きてゆけないといわれるが、それは神の存在を各自の精神が本当に渴望しているからでなく、多数派が宗教を重んじる社会の中ではアッラーへの祈りはそのままその社会から爪弾きされないための自己防衛手段となるという見方を私はとり、いつもソマリア人たちに軽蔑される。

年に一度やってくるラマダーン期は要するに仕事仲間が腹をすかし、私が軽蔑される時なのであり、「また

か……」という嘆息へとつながるのである。

そのラマダーンが来月初旬まで続く。特に肉体労働者には労働時間短縮等の配慮をし、午後にはできるだけ仕事を与えぬように気を使った。5月に給食プログラムは始まった。センターでは腹をすかした大人たちを尻目に子供たちがうれしそうに粥を口に運んでいる。

コーディネーター
掛村 均

ラマダーンが
やってきた

ルシナの木陰で



農業技術者 高橋 一馬

ルシナの木陰で

用水路の土手のパーキンソニアやルシナの木陰に腰をおろし耳を澄ます。ブンブンと蜜蜂が飛び交う羽音、砂糖キビの葉が風にすれる音、用水路をサラサラ流れる水の音が聞こえてくる。農民達が一心不乱にクワをふって農作業をする横で、木につながれたヤギは草をはみ、おかみさん達は男達のためにお茶をわかし、赤児におっぱいをやっている。ポンプであげられた水の流れる用水路には、洗濯をする者や水浴びをする子供達の姿が見られる。子供達の歌声も聞こえてくる。

ここにいるとまるで東南アジアの農村にいるような錯覚をおぼえる。つい一年程前までは私がここに来ると皆ぞろぞろと集まって来たものだが、今はこちらから声をかけなければ誰も近寄ってこないし、話をするときも作業の手を休めることはない。農作業がすっかり日常生活の一部になっているのだ。

私が今いる木陰は風蝕を防ぐため水路の両わきに植えた木々がつくっている。1年半ほどで大きいものは6~7mにまで成長した。最初の2~3カ月は水を忘れずにやらねばならないが、1mぐらいになると水路から自分で水を吸いあげることができるので、その後は全く世話をする必要がない。これらの木々は風蝕を防止するだけでなく、人々がお茶を飲み語り合う「憩いの場」も提供する。またルシナは庇蔭樹、肥料木としても有効である。畑と畑の間にルシナを植えておくと強い日射量がさえぎられ、温度がさがる。強風も防ぎ、落葉は栄養価が高い家畜のエサでもある。遊牧も行うソマリア人にとって、家畜のエサの確保は重要である。将来はこの木を短冊型に密植し、葉や小枝を刈りにとって飼料にするこ

とも考えている。ルシナは更にムンドルの支柱としても適しているし、何より燃料になる。ハルガンキャンプやドリアンリーキャンプなどでは近くの薪がとりつくされてしまったため、高い金を出してタキギを買っている。ルシナは成長が早いので植林にも使われているが、短所は前述した初期の管理である。この時期を過ぎれば種子は無尽蔵につき、木陰には他の植物も復活するであろう。

サトウキビ

サトウキビの葉が風にゆれている。84年5月、共有地を中心に、防風、砂糖用、青果用として初めて植えた。植付け後一年で収穫が可能である。肥料分が豊富なものは太く丈も大きくなり、その重さで倒れるのだが、JVC農場は砂地で肥沃度が低いいため、サトウキビは直立し葉もほとんどが天を向いている。熟れると刈り取られ、マーケットで1本5~10シリングで売られる。子供や女達のおやつになっているようだ。土地が充分肥えていると、刈り取った後も次の芽がでる。これを株出しというが、概して株出しの場合新しく植えたものと比べて発育も収穫も劣るし、病害虫に対する抵抗力も弱くなる。この農場でも、黒穂病という新芽が成長しなくなる伝染病にかかっているものは、見つけ次第焼いてしまう。サトウキビの葉とハカマ(葉鞘)はムンドルの屋根を葺くのにも用いられている。他の地区では、藤や竹のかわりに葉の硬い皮の部分を使ってザルやボラを編んでいた。この編み方を知っている人を探して、農民やおかみさん達に教えてもらえればと思う。ただし換金作物としてのサトウキビのウェイトが高くなり、モノカルチャーになってしまう危険性があるので、たえず注意を払わなければならないだろう。

養蜂をはじめ

働きバチが忙しそうに出入りする巣箱が見える。一年半程前、モデルファームのトウモロコシに穂は出たものの実はつかず、昆虫数が少ないため授精率が低いことが原因かもしれないと考えた。その時以来、蜜蜂を導入することを考えていた。以前に倒れたトウモロコシに蜜蜂が群がっているのを目撃し、農民の中でエチオピアで養蜂の経験をもつ者に簡単な巣箱を作ってもらおうと宿舎に道具をとり帰ったのだが、戻ってみると蜜蜂の一群はもはや飛び去ってしまっていた。残念だったが、これを機に農民の中で一番詳しいアリコテラから話を聞き、試験的に

各農場に巣箱を一つずつ作ってみることにした。材料はJVCが提供し、農民が現地風の枝を使ったものを4つ作った。巣箱の中を煙でいぶし、高い木の川に面した側に置いたところ、早いもので3~4日、遅いものでも2週間で密蜂が巣を作り始めた。アリコテになぜ今までやらなかったのか聞いてみたが、こころは暑すぎて無理だと初めからあきらめていたという。コロオリではヤシの木をくり抜いた巣箱や、オイルの空き缶、セメントのヒューム缶にまで密蜂が巣をつくっていたので、現在、上流から流れてきたパルシアの木をくり抜いたものと、キャンプにころがっている配給食用油の空き缶を試している。もし空き缶が成功すればキャンプの中でも始める者がでてくると期待している。

土作り

マーリンアブディの畑が見える。彼は10m四方の畑に、メイズ、ソルガム、スイカ、カウピー（インゲン）、トマト、パパイヤ、バナナ、キャッサバ、ルシナ、サトウキビ、マンゴ、ハッカと何と12種類もの野菜や果物を植えている。モノカルチャーの場合、病害虫が発生すると全滅の憂き目にあうが、混植（作）の場合、ある作物が被害をうけても他の作物は助かる。ある虫が好む作物をわざと畑の一角や外縁部に植えて被害をくいとめる方法もある。混作の効果は他にもある。野菜の側に樹高の高い作物を植え、強風や日光をさえぎる。また土地を立体的に利用することにより限られた面積を有効に使うことができる。

雨期の頃、トウモロコシの若芽がメイ虫の被害を受けた。この駆除には天敵法を用いてみたい。無農薬の場合この天敵法か、作付け方法、時期作物をかえる耕種法が一番よいはずである。

ルーク地区は基本的には砂地であり、肥沃度を高めるための土作りが重要な課題だ。ジュバ川の濁り水をくみあげること自体が客土であり、灌漑の時間が長ければ長いほどその効果はあがる。

その他緑肥や家畜の糞等の有機質の投入も土作りには必要であるが、これらは非常に労力のいる作業だ。緑肥の場合、草を家畜のエサにしないで土の中にすき込む人が何人いるか心もとない。それより家畜（主としてヤギ）の糞の方が確実であろう。朝早くおかみさん達が乳をしぼった後、子供達がブッシュの中を連れ歩き、夕方再び搾乳し夜は家の回りの囲いの中で過ごす。糞はその囲いの中に堆積しているので、農場にまけば良い有機質肥料となるはずである。

土作りとして、マメ科の作物を混作の中にくみこんで、根溜バクテリアによる空中窒素の固定作用を利用した肥沃化をはかる方法もとりいれている。JVCの農場と周囲のコラボティブ農場など、このマガネイ地区で作られているマメ類を農民と一緒に集めてみたら、何とぞっと50種類もあった。詳しく調べるとその数はもっと増すかもしれない。ともかく比較試験栽培を重ね、農民の注意を喚起し、良いものを選抜して土作りの一助としたい。アフゴイにあるソマリアの農業技術試験場を訪れ、品種名や性状を尋ねたが、どうやらあまりマメ類の研究に力を入れている様子もなかった。JVCが独自に力を入れてみるのも面白いだろう。低下しつつある収量は農民の生産意欲を減退させ、ひいては土地離れの現象を起こしかねない。土作りに向けての諸対策は、今後営農指導を行っていく上で最も重要な課題になってくるに相違ない。

地元民の農法に学ぶ

モデルファームに目を向けてみよう。ここはいうまでもなくJVCの農業技術指導・営農指導の拠点である。我々は基本姿勢として地元民の農法をまず踏襲し、漸次改良を加えていく方法を今後もとり続けるべきであろう。もちろん新作物や新品種はまずモデルファームで試験的に栽培する。良いものは農民が見て知っている所以他们自身が選択する。全く未知のものは育て方食べ方を教えていけばよいだろう。これまでオクラやエンサイ、キャッサバなどの紹介や、サシ木によるトマトの増殖方法を試してきた。今後パイナップルや繊維作物としてのサイザルの導入を考えている。サイザルは葉に鋭いトゲを有するため家畜の侵入防止柵を兼ねて境界に植えればよい。縄やヒモの材料が乏しいので貴重である。

他にも適正灌漑間隔の試験をする等モデルファームの役割は大きい。これまでほぼ毎日、農場をまわったの体当りの営農指導に力を注いできたため、モデルファームはおろそかになりがちであった。しかしスタッフも増えたことだし、ここを拡張し、土壌、気象、水質など基礎データの蓄積をめざし、また作物の試験栽培も多種行いたい。そして農民やワーカーの中から農業に興味のある者、特に若い世代を中心に実践教育をしていかなければならない。また農業指導のみならず、メカニックの養成、青空教室での授業等を通して、将来ここがコミュニティセンターとしての機能をはたすようになれば素晴らしいであろう。

●(ソ)●(マ)●(リ)●(ア)●(だ)●(よ)●(り)●●●●●●●●

ソマリアのメンバーの中には定期的に通信文を送ってくる人たちがいます。自分を送り出してくれた支援団体への報告義務のようなものですが、これを少しご紹介してみましょう。No.59の佐久間さんの写真集(?)を参考にして下さい。



時にはこういう格好も……

360度の地平線 5月号

中川正憲

突然始まってしまった養鶏場

とはいうものの、プランは前々からあったのだ。話は昨年(1997年)の10月にはできていたのだが、始められなかった理由を今さら愚痴っても意味のないことなので、アウトラインの紹介とこれからの計画などを記しておく程度にとどめておこう。こまごましたことは特にこの地では必要ない。目的は難民がこの土地で生きていけるための方策をなんとかみつけないことなのだ。農業技術上のデータより、おおざっぱでもこういうふうにやってよかったという反応を得られればいい。

よしやるぞ、と決めたのは3月の末、ケニアへ行った帰り40羽のヒヨコ(R・I・R系)を求めてきた。4月5日から助手2人とともに工事を始めた。途中何人かのワーカーにも協力を求め、鶏舎は5月8日に完成した。当初考えられていた8万シリングの予算を大幅に下回る工事費となったはずである。

鶏舎は3×3メートルのものが4棟、それに3×2メートルの倉庫ができた。飼いは各棟10~15羽の平飼いで、飼料ははじめの1カ月分のみソルガムを購入した。あとは週に一度河でナマズをとって与え、雑草や虫を放りこんでやるだけの大きざっぱだが、飼料の構成は十分である。現在飼料用の畑では、ソルガム、サツマイモ、カボチャなどが生育中であり、6月半ばには鶏舎の屋根にメロン、キュウリ、レイシも繁ることになっている。現在ヒナは約30羽、それにもう何十世代も異った血が入っていないだろうローカルのメンドリが11羽。6月には再びヒナを取り寄せ、全棟がうまるはずである。

過日、鶏舎にヒヨコを移した夜、様子を見るため

農場で一泊した。しょっちゅう見張りが声をかけるのと、蚊にさされるので眠るどころではなかった。深夜に巨大なフクロウは見たことはあったが、そんなことぐらいで大したこともおこるまいと思っていたところ、数日前に1.5メートルはありそうな蛇が現れた。仔犬(これを鶏舎の番犬にしている)が吠え、見張りが蛇を殺したとか。その翌々日、日中に2メートルばかりのワニが鶏舎をよじ登っているのをこれは小生が発見。逃げ足の速さによってとり逃がしてしまった。

といったところで、まずは順調に進んでいるというてよろしかろう。

寺小屋? マガネイのガキども120人

当初はお茶の時間の利用のはずであった。もとはといえばモデルファームのワーカーにお茶の時間の暇つぶしに英単語を教えたのがきっかけで、ある日子供にもノートを与えたら、数日後には50人を越え、農民の子供のみならずマガネイ・キャンプから次々とおしよせてくるということになってしまったのだ。相変わらず新しい顔が現れる現状ではなかなか前へ進むことができず、アルファベットばかりかソマリ語さえ教えなければならない。

学校というようなものとはほど遠い代物なのだが、10時半からと伝えてあるにもかかわらず、9時すぎにはぼつぼつと子供が集まりはじめ、本来の仕事にさえ影響がでてくるしまつである。とはいえ、われわれのここにいる理由を考えると、彼らを追い払って選ばれた農民やその家族だけを相手にすることはどうしてもおかしい。

ということで、次の段階を考えねばならないのだ。定住のなんと空論で時間をつぶす前に、ひとつずつ現場で必要となってきたものを整理していこう。とりあえず、なあーんにもすることがないガキに、ボールをいくつかと、ボールを蹴る場所を与えることぐらいはすぐにでもできるだろう。

報告書

庄 司 美

4月12日に日本を離れ、4月16日ソマリアに入りました。10日間のモガディシュ滞在の後ルークに来て早や1カ月がたちました。初めの頃は照りつける太陽のものすごさに、とにかく農場で立っているだけでクラクラし、こんな所に1年間もおれるものかと思ったものです。また5月7日の自分の日記に、「自分のおなかの調子伺いをするためにここに来たんじゃないんだぞ」と書いたのですが、ようやく身体も落ちつき、胃腸も順調な動きをするようになりました。そんな風に自分自身を、この気候、この生活に慣らすのに四苦八苦しているうちにいつの間にか1カ月が過ぎてしまったような気がします。

最近自分が一貫したことを何もしていない、何も始められない状態であることに少々焦りを感じています。特にこうやって改めてカレンダーで日にちを確認し、飛ぶように過ぎていった1日1日をかき集めると、実に1カ月にもなり、胸にずっしりしたものを感じてしまいます。「焦ったってしゃあない。tartiib tartiib (ゆっくり、ゆっくり)」と思いつつも、やっぱり「何かせな。早よう何かせな」と思ってしまう自分がいて、「あかんー」と独りでぶつぶつやっている今日この頃です。

そんな次第なのですが、とにかくこのひと月「やってみたこと」を記録しておこうと思います。

1. 4月29日、日本より持ってきた竹(四国の福岡正信さんより預ったもの)を4株モデルファームのメインチャンネルの脇(ポンプの近く)に植えた。ルシナの木の影響となる場所である。

福岡さんの山からルークまで25日も経っていたので植える時点で黄色くなっていた。

5月25日現在変化なし。

2. モデル・ファーム

- ① 葉菜区の一部にハウレンソウを、別の一角にターツァイ(いずれも昨年福岡さんが日本より送ったもの)を4月30日と5月1日に播種。

全く出芽せず。

- ② 上記を再度耕し、畝立てし、白菜を播種。

(5月21, 22日)

- ①の場合、種子が腐っていたかもしれないこと

と、ハウレンソウがこの気候に合わなかったことがあげられるが、1番大きな原因は播種した後2~3日ポンプの故障のため冠水できなかったことが考えられる。

3. JVC 農場

どんな作物をどんな風に作っているのかを見ると農民に会ってみたいのとで農場を歩きまわったのだが、播種直後の上日中の暑さ中だったせいか、どこへ行っても人影が見られず、驚いてしまった。

4. 各農場ごとに良、不良の畑(1家族分)を選び、五十嵐氏と作付調査、生育調査をした。

5. 料理教室に備えてマーケットで素材の調査をしたり、日本人やソマリア人のスタッフの食事の準備をそれぞれ見学した。

主だっってやってみたことといえば以上のようなことぐらいで、あとは補助給食の様子を見せてもらったり、モデルファームでお手伝いをしたり、とにかくここルークの全体の様子を知るのに1カ月を費した気がする。それでもまだ人々の生活については全然わかっていない。

これからは家庭菜園、モデルファーム、また料理教室などもやってみたい。まだはっきりした方針がないままだが、どうするにせよ、もっと人々の生の生活を知りたいと思う。なぜなら「食」というのは生活そのものであり、切り離せないものであるから。

人々の生活(特に食事の内容、料理法)を知りたい。とりあえず、5月25日よりモハメッド・ハジ氏の協力を得、千田氏、五十嵐氏とともにマガネイキャンプの人々を訪ねて歩き始めた。

いずれにせよ、マァ、アセッタらあかん。けど頑張らあかんてえ。と、6月に向けて自分を励ましているといったしだいです。

なかがわ まさのり：農業技術者

中部リサイクル運動市民の会から派遣される。1985年9月から1年間の予定。主に養鶏と農民の生活改善に当たっている。料理の腕は玄人はだし。

しょうじ びい：農業普及員、栄養士

砂漠に種をまく人の会から1986年3月から1年間の予定で派遣されている。現在は研修中。JAST(農業学生グループ)のメンバーでもある。

わたしたちもあのように生きたい

ソマリアのマグドール・キャンプで医療活動をしている石井弘代さんが一時帰国し、母校の新宮高校で講演を行った。これは衛生看護科の載帽式の記念講演として行われたもので、石井さんのソマリアでの活動体験やその生き方は生徒たちに大きな反響をよんだ。特に3年5組では担任の経田先生を中心に感想を文集にまとめるなど、感動の輪が広がっている。そのどれもが自分の生き方を真剣に問いかけている。

感動する人間でありたい

日坂

石井先輩の講演を聞いて私は強く感動した。テレビなどで飢餓に苦しむ人々の姿を見て、あの人たちの役に立てればと思っていた。その私があの講演を聞いた時は本当に感動した。

こんなに身近にあのような仕事をしておられる方がいたとは……。

講演の後、石井先輩とお話するチャンスを与えられた時とてもうれしかった。とても細く、小さい身体のどこにあんな勇氣あるパワーが潜んでいるのかと思うほどだった。帰るまぎわに握手をしていたのだが、小さな細い手は温かかった。

素直に生きる事はとても難しいことだと思う。どこかで自分にうそをつき、どこかで人にうそをついていると思う。きれいな物をきれいだと、楽しいことを楽しいと、また苦しい時に苦しいといえる。それも素直に生きるという事だと思う。

石井先輩は異国の地に行って苦しくつらい思いもしただろう。それを苦しかった、つらかったと言える。そして「行って良かった」と……。

私も感動する人間でありたい。

すごい力がわいてきた

佐野たみこ

私はあの講演を聞いてから、なんか自分にもすごい力がわいてきた。「何かやってみたい」「私にできることがあるなら」「1人でも多くの人の力になれるならどこまでも行こうじゃないか」という考えが頭の中をめぐっていた。

そして先生が「話しに行こう」と言ってくれた時は

“この人なら今の私たちの、この満足感のない不安ばかりの生活にピリオドを打ってくれるんじゃないか”と思って先生についていった。すると私たちより10歳も年上の方が、私たちよりずっと素敵な目をして、私たちよりもずっとずっと素直に、真直ぐに、新鮮に物を見て、考えておられた。

「～してあげよう」という考えなんかこれっぽっちもなく、自分から進んでいるんなら勉強をし、それでいて楽しんでいるようだった。

私は石井さんに会えてよかったと思う。また一段と私のエンジンに火がついた。これでもう私は横道にはそれないと思う。自分の思った道をどんどんまい進して行こうと決心した。そして最後には女の夢である結婚。子供を産むために心の支えとなる人はちゃんと見つけたいと思う。ただ今は夢を持ってヤル気に燃えている。

本当の看護がしたい

大城 志保

私はこのごろ「何のために生きているのだろうか」とよく考えていました。そして答が見つからないまま毎日を送っていました。そんな時あの講演を聞き、目が覚めるような気がしました。私のめざすものにめぐりあえたと思い、感動で胸が一杯でした。

石井さんは不便で何の楽しみもない所へ行き、本当にいろいろ苦労があったでしょうに生き生きとしていました。自分から進んで未知の国へ行かれ、生



マグドール・キャンプで

きることのすばらしさを体得し、本当の意味での看護をしてられました。誰もができることではありません。

私も石井さんのように「生きる」すばらしさを感じ、本当の看護をしたいと思います。甘えを捨て、心から苦しんでいる人々につくすことが私たちの生まれてきたことの証となるのではないのでしょうか。

一度死にかけた命です。あとはくいのないように本当に私を必要としてくれる人のために捧げようと思っています。

素直な生き方に感動 無記名

本当に感動した話だった。それだけに石井さんともっと近くで話したいと思い、先生といっしょに石井さんの所へ行った。そこでいろいろ質問して石井さんの考えを聞かせてもらうことができた。石井さんのように難民救援を少しはやってみたいとは思いますが、いざ行くとなると不安だなーと試してみたりする。でも外国へ行くだけでも考え方は違ってくるのだと聞くと、あーやっぱり一度は外国に行ってみようと思う。

講演の中の話で、石井さんが久しぶりに日本に帰り新幹線で寒そうにしていたらおばさんがスカーフを貸してくれたという。その親切を素直に受けとった石井さんに感動した。それを聞いた時、こんな考え方ができるなんて!!と本当にすばらしいなあと思った。私は人に親切にしてもらったら今度は私が他の人に……と思えるような生き方、考え方をしたい。私も自分がやってみたいと思ったことは、他の人の迷惑になったり心配をかけることになるかもしれないが少しでもやっていきたいなと思った。

ボランティアせなあかな 高田 知美

石井さんの話を聞いてなんて勇気のある大きな人だろうと思った。テレビで難民や飢えに苦しむ人たちのシーンを見ると、寄付とかボランティアせなあかなとか思うけど自分が現地で働こうとまでは考えられなかった。私がオーストラリアに行って見てきたことと随分違ってて恥ずかしかったです。目的とか年齢とか経験の違いもあるけど。

将来実際にカンボジアへ行くともまではいかないかもしれないけれど、同じ病棟ならみんなが行かないような精神科とか障害者のところ（よくは知らないのですが）へ行きたいです。こう書いていると自分が思いあがっているようで……嫌です……。

石井さんにホスピスについて少し教えてもらって感動しました。ホスピスというのは新しいものではなく、人間の生死の原点にかえることなんですね。ホスピスについて構えすぎていたのかなー。

ボランティアとして見習いたい 伊野 恵美

載帽式は毎年見ていていいなーと思う。あの静かな中で行われる儀式はどこの学校にも自慢できると思う。2年生たちの誓いの言葉を聞きながら私も自然に口ずさんでいた。再度誓いをたてた気分でした。誓いの言葉を言う2年生の決意が私たちにも伝わってきたようでした。

講演については「あー、この人が私たちの先輩なのか……」って感動しました。私もボランティアをしている1人として見習いたいです。「私とボランティア」について言えば、自分の周りのことしか見ていないように思います。もっと兵庫県、そして日本、世界へと目を向けて行きたいと思っています。

ただ時代に流されているのではなく、自分自身の存在を認めてもらい、自分が必要とされる所で自分の実績を残し、「伊野恵美」という1人の人間がこの時代に精一杯生きていけたらと思う。

病院実習前の2年生のあの生き生きとした目、燃えている目を私にもよみがえらせて！

最後にこの文集を送って下さった3年5組担任の経田勉さんは次のように書いている。

自分に素直に生きること。

この簡単な言葉の中に、石井弘代さんのあの大胆ともいうべき行動の涙がかくされているのは信じがたい。何が彼女をあんなに大きく羽ばたかせたか、それが知りたかった。彼女は自らありきたりの高校生であったという。もしほんとにどこにでもいるありきたりの高校生だったとしたら、素直に生きようというこだわりがそれほどまでに人生を変えるものであることを知ろう。いい変えれば君たちにだってその可能性を見ることができる。ダメだ!!とってあきらめない限り現状からは想像もつかないすばらしい世界が開けるかもしれない。

お姫様などになるわけではない。アイドルになるわけでもない。アフリカで病気や貧しさと戦い、泥まみれになる姿は決してキレイではないだろう。しかしその生き方はこの上もなく美しいと思っている。表面的な装飾に気を奪われることなく、人間としてやさしく生きているから……。

JVC 第4回会員総会

第4回会員総会が6月8日、昨年と同じく飯田橋の東京都婦人情報センターで開かれた。今回は初めての試みとして、前日の6月7日に早稲田奉仕園セミナーハウスで東京のスタッフやボランティアの手によるカンパチ料理を囲みながら親睦会が行われた。これには山形や奄美大島からかけつけた人もいて、日ごろ顔を合わすことのない会員同士が交流もあった。



親睦会

午後3時をまわったころから少しずつ参加者が集まり、「人と木——砂漠化と闘うサヘルの民」(ユニセフ製作)の上映が始まるころには、開け放された8畳と10畳の部屋に20~30人もの人々が集まっていた。

親睦会は予定どおり午後5時に始まった。このころには雨にもかかわらず、人数は50人以上になっていた。自己紹介のあと、それぞれふだんから疑問に思っていることや意見を交換。スタッフの家族も参加し、給与体系や結婚問題にまで話が及んだ。

シンポジウム「JVCの今後の方向について」

JVCが今後も海外協力を続けていく上でどのような方向性があるのか。いろいろな形で海外協力を行っている方々やJVCのスタッフがパネラーになり、その経験をふまえてJVCへの提言をした。



嶋 紀晶

以下はその発言録をまとめたものである。

司会：加納 妙 (かのう たえ)

JVC 事業担当

まずJVCから嶋紀晶が現場での経験から現在感じていることについて話をした。

嶋 JVCは組織として未成熟であるが、その活動にはメンバーの創造力が生かされている。これに対し欧米の団体は組織が優先している。JVCは組織が小さいせいもあって「友だちになるうよ」という基本精神が生かされている。今後は活動における様々なアプローチを整理し、勉強していかなければならない。

問題点としていえることは、海外での経験が個人のものにとどまり、組織に引き継がれていないことである。接点は東京オフィスにしかなく、あとは個人と個人の点のつながりしかない。また国内で自分たちの活動について話せる場が少ない。話をしたとしても「よくやっていますね」で終わりだ。もっと地域などにも活動の輪を広げなければと思う。

アビト アフリカから帰って、広い視点から日本について感じたことは？

嶋 食べ物が石油でできているような気がした。すべてのものが小さく見え、自分はソマリアに行っ

パネラー：笹生博夫 (さそう ひろお)

カメラマン、青年海外協力隊でマラウイに行く。

ルーベン・アビト

上智大助教授、イエズス会司祭。在日17年になるフィリピン人。

吉田新一郎 (よしだ しんいちろう)
建築家。市民による海外協力を推進。

金田 衛 (かなた まもる)

外科医 SHARE—国際医療情報センター代表

嶋 紀晶 (しま としあき)

JVCソマリア代表



金田 衛

てから声が大きくなったように思う。

加納 遊牧民との関係でとまどいは？

嶋 いろいろすれ違い、3カ月ぐらいは精神が疲れた。

続いてSHAREの金田さんから最近のSHAREの活動と問題点について話があった。

金田 SHAREは結成以来3年になる。これまで毎月月例会を開き、医療関係以外の人も講師に呼んでいる。現在会員は200人いる。

問題点としてあげられることは、①活動メンバーが少なく固定化している。②拠点病院を作りたい。若い人が多く、一度海外に出ると職場がなくなる。③日本で要求される医療と海外で必要とされる医療は違う。日本にいても海外で使いものになるようなトレーニングが必要。④山谷で活動しているメディール会で感じたのだが、彼らは13年間もここで続けている。持続することの大切さを感じる。また彼らは労働者一人一人の名前を覚えているのにも感心した。自分たちもこれから5年、10年のうちに体力をつけたい。



ルーベン・アビット

ルーベン・アビットさんは搾取と援助を右手と左手の例からわかりやすく説明した。

アビット 数年前に見たベトナム戦争の映画では右手で住民を殺し、左手で助けているという印象を受けた。PVO(民間ボランティア団体)の活動はその



吉田新一郎

左手にあたっていないか。左手だけで満足するのではなく、右手もどうすればいいのか考えなければいけないと思う。広い視野から見れば日常生活は右手にあたる。

人権という言葉があるが、簡単にいえば生きる権利を守るということである。人権を守るということは、指紋押捺反対も飢餓からの救済も含んでいる。

吉田さんは持参した資料を見ながらPVOの今後の展望について述べた。(図1)

吉田 自分の専門は都市工学だが、大学院時代に第三世界の都市計画、つまり国家全体にまで及ぼすものについて興味を持ってしまった。しかししだいに都市の入れ物の部分(ハード)よりも人間の出会いの場としての都市(ソフト)の方を考えるように

なった。

日本でPVOが根づくためには、より広い層の参加が可能なサード・ワールド・ショップや文化運動の推進、またはJVCと砂漠に種をまく人の会のように他の分野で活動している団体との共同作業も有意義だと思う。

笹生さんはアフリカ行動委員会のメンバーで、反アパルトヘイト運動を行っている。

笹生 現在は南アフリカとナミビアの問題が自分たちの行動の中心である。この2~3年にアフリカはブームになったが、これでアフリカが近くなったとは思えない。日本人は外に出向くようになり、関心も広がった。しかし外国人を自分の社会に受け入れることはしない。



笹生博夫

海外とのつきあいは第一段階として物、金そして人を送ることができた。第二段階はアパートの隣人などに難民を受け入れるようになることだが、残念ながらこれはできていない。日本での海外協力の歴史は始まったばかりで、これからという気がする。

質疑応答

—右手と左手の問題には政治がからむ。JVCも政治とからんで苦しむことはないか。現場はどうか
嶋 ソマリアの場合現地の役人から制約を受けることはない。

笹生 今その問題で悩んでいる。ANC(アフリカ民族会議)の学校を支援している。日本政府も彼らと交渉を持ち留学生を呼びたいという。政府は私たちにも力を貸してほしいというが、私たちは独自で留学生を呼びたい。しかし政府が呼んだ方がより多くの人を受け入れることができる。結局は自分たち独自でやることになったが悩んだ。

加納 エチオピアの緑化プロジェクトを始めるにあたって新聞記者の中で反対する人がいた。彼はエチオピアの再定住政策を疑問視していた。しかし、自分たちはその政府を乗り越え、その村の人々といっしょにやりたいという気持ちの方が先行していた。—海外の活動で疲れている。国内にフィードバックしている人はエライと思う。日本の社会は変わりうるのだろうか。

笹生 変わらないといえば変わらないかもしれないが、自分たちの存在を信じているからこそ希望が持てる。それでなくてはやっていけない。

—具体的に国内活動を提案してほしい。

吉田 開発教育を暗いものにするのではなく、楽しさ、おもしろさ、豊かさを伝える努力がほしい。

日常業務の中に音楽、芸術などを企画するスタッフがいてもいいと思う。右手と左手の問題も頭の隅に入れた上で楽しくやったらよい。

アビト その点は大賛成。政治的な集会を10年ほど前から開いているが、顔ぶれが決まってしまう限界を感じている。楽しい催し物もして大ぜいの人を巻きこむことが大切。

総 会

シンポジウムに意見、質問が集中したせいも、総会では活発な意見交換が見られないまま85年度活動報告・決算報告、86年度の活動計画・予算案は可決された。

岩崎代表は今年度のJVCの特長として①農業に力を入れる。②第三世界の人々の生活改善を手助けをする。③タイの場合日本人スタッフの数が減り、メンバーが国際化していることをあげた。

ついで執行委員の交代があった。栗野鳳、荻野美智子、関田鶴子の3氏が辞任し、新たに本橋栄(U NHCR, NGO担当)、内山田康(JVCエチオピア代表)の両氏が選ばれた。両名は来年の総会まで1

年の任期を務める。

会員制度の見直しについて

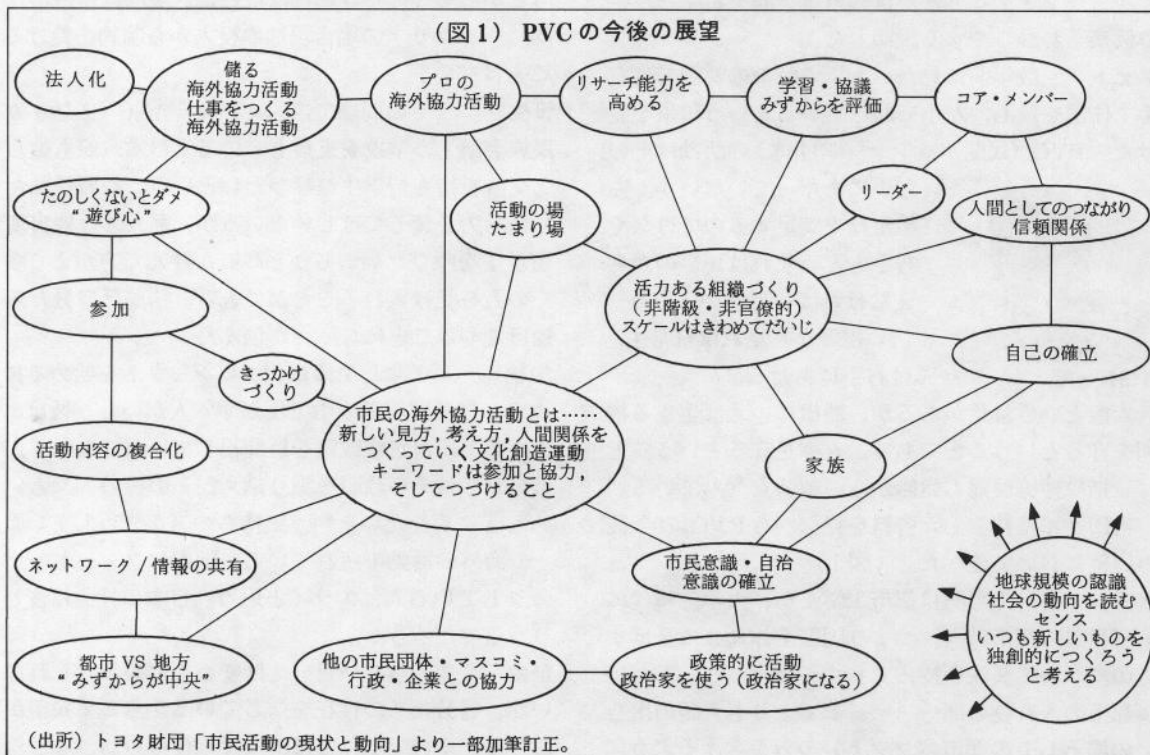
なお現在の会員数は5月31日現在で、正会員740人、賛助会員107人である。昨年度と大きな変化は見られないが、内容から見れば会費未納の会員も多く、組織的には後退しているともいえる。

これらの点について「JVCの活動は日々刻々と変わり、日常業務に携わっていないと把握しにくい。JVCは“参加”によって成立しているのだから、ボランティアのための呼びかけは特にしていない。そのためJVCから離れてもしかたがない」。また「会員制とそのために開かれる総会は儀式でしかない。この場で活動の方針を決められたことはないのだから実情に合った、もっと別の制度にした方がよい」などの意見がある。一方「事務局から会員に対しての働きかけが不十分であり、組織づくりのための努力を怠っているのではないか」という見方もある。

よくいわれるようにJVCは固定化された組織ではなく、そのために機動性もあるかわりに活動者と非活動者の連帯感は希薄である。

会員制度はどうあるべきなのか、御意見のある方はぜひお聞かせいただきたい。来年も総会を迎えるが、次回はぜひ実体のあるものになりたい。

(図1) PVCの今後の展望



「主要 NGO 諮問グループ会議」に参加して

日産玉川病院 本田 徹

UNDROとは

一般の日本人はもちろん、私たちボランティア活動にかかわる者にとってもUNDRO（Office of United Nations Disaster Relief Co-ordinator—国連災害救済調整官事務所）という国連機関はなじみが薄い。そこでまずUNDROの来歴、役割について触れておきたい。

UNDROは1971年12月、災害時の国際的な救援活動を、より迅速で協調のとれたものにするために国連総会決議No2816に基づいて設置された。調整官は被災当事国からの要請に基づいて、国連システム内の諸機関及び各国政府NGOの救援活動を調整したり、災害の研究や予防のために情報を提供するなどの任務がある。

会議の目的

災害救援活動における国際協調のための中心点として十分機能するために、UNDROが今後どういう方面にいかなる努力を払っていかなければならないか。こうした問題について、実際に災害の現場で活動している主なNGOの責任者から意見を聞きたいという主旨で今回の会議は開かれた。もちろん単に意見を聞くだけでなく、これらNGOとの提携を通して、従来現場への直接のチャンネルが弱かったUNDROの機動性、影響力を強化したいというねらいも働いたであろう。

招かれた諸団体は事業規模の点では決して大きいとはいえない。国際救援を行っている巨大な団体はいくつもあるが、それらのほとんどはジュネーブに代表を置いているのでこの会議にわざわざ招くまでのことはなかったらしい。欧米偏重にならないように地域的なバランスをとり、UNDROがこれまで十分なコミュニケーションを結んでこなかったアジア、アフリカ、ラテンアメリカの団体にも呼びかけたようである。

もっと女を、もっともっと土地の人々を

正味一日半の会議で話し合われたことは、多方面にわたってうまく概括しにくい。そもそもこの会議は特定の問題について、NGOやUNDROを拘束する公的なとりきめを交す場ではなかった。今回は

初めての試みということでもあり、各代表がお互いを知り親睦を深めるといった性格が強かった。

従来UNDROとNGOが災害救援の現場でいっしょに仕事をしたという経験はあまりない。いきおいNGOがUNDROに諮問したり意見を述べるといっても、現場における両者の共通体験に基いた具体性のある話にはなりにくい。したがって話題もあちこちに飛び、本当の意味での諮問とはいえないものであった。

ではまったく無駄な集いであったかということもそんなこともない。少なくとも私のような“井の中の蛙”にすぎない日本人にとっては、救援活動の最前線にいる専門家たちの頭の中に今どんなアイデアや問題意識が宿っているのかを教えてもらっただけでも大変刺激的であり、啓発的だった。

その話題の中から2～3あげてみると、このような会議に女性の参加者を増やしたい（女性が代表者のNGOが少ない）。またもっと第三世界からのNGO、被援助国側のNGOにも門戸を開こうということがいわれた。もっと女を、もっともっと土地の人々をである。

感想

たとえどんなに小さいものであっても、国際会議と名のつくものに顔を出すのが初めてだったので、本当のところものすごく緊張した。

英語の聞きとりはあまり問題はなかったのだが、自分のいいたいことをまとめようとしている間は相手の発言がすっぱり抜け落ちてしまう。もっともっと英語を叩きこまなければならないと思う。

語学以外で感じたのは現場経験の差である。もっとも開発や救援に関する第三世界での経験が40年以上という人に立ちうちしようというのばかげているが。

そこで以上の“ごまめの歯ぎしり”を、今後の課題として4つにまとめてみたので参考にしてほしい。

- ① 語学の習得
- ② よい意味での社交性
- ③ 現場（フィールド）での実力養成
- ④ 第三世界のNGOとの提携の強化（西欧の先輩NGOから学ぶことはもちろんである）

同じ乗り物に乗れない人々

JVC事業担当 古西 勇

今から3年前、東京に春の季節が訪れようとしていた頃、カンブチアの子供たちを連れて3人で遊園地に遊びに行った思い出があります。男の子のピチェット君は小学校5年生。ベアスナーちゃんは彼より1つ年上のお姉さんで、小学校を卒業しようとしていました。彼らの両親は亡く、義理のお兄さんが2人を養っていました。私は彼らのために、週に1回家庭教師に通っていました。夕刻からの数時間、小学校の勉強の予習や宿題を手伝いながら、私は彼らの将来に多少の不安を感じていたものです。それは日本社会において少数者であり、目の前に日本語という障害が横たわっている彼らが、日本社会という乗物に酔ってしまうのではないかという不安でした。

安全なところで暮らしたい

1984年11月、私はタイ・カンブチア国境の地を踏みました。国境上に点在するカンブチア難民村の1つのノンチャン難民村で、私はJVCの補助給食プロジェクトに参加しました。難民村はそれで1つの機能する社会であり、村人は自分たちの乗物に乗っているという自信と活気に満ちていました。私が最初にそこを訪れた日から幾日後に、彼らの上に村を1つ破壊するだけの砲撃がふりそそぎました。

まさに悪夢としか言いようがありませんでした。暴力の存在をあれほど心にひしひしと感じたことはありません。アランヤプラテートの町にある私たちの宿舎では、わずか数十キロメートルしか離れていない所から砲声が響いてきていました。砲声は時には休みなく、時には少し間をおいて、夜通しで何日にも渡って空気を焦がし続けました。安全保障など到底不可能なため、彼らが最も助けを必要としているその時に、私たちは彼らの避難地にもしばらくの間近づくことは許されませんでした。

国連の先導により避難地へと辿り着いた人々は、懸命に抱えてきた衣類や生活用品を傍に置いて、荒地の上で野宿を始めました。安全保障が最低限の基準にまで向上すると、まず医療チームのボランティア団体が彼らに対する活動を再開し、JVCの補助給食チームがそれに続きました。

避難地にいる病人たちと栄養失調の子供たちのために、カオイダン難民キャンプで調理された給食が毎朝運ばれました。給食を載せたピックアップトラックを運転する私たちを待っていてくれたのは、給食を受け取って病院などに届けてくれる若者たちでした。そのうち英語を話す青年が、給食をトラックの荷台から降ろす手を休めながら、「ここにいたらいつ砲弾が飛んでくるかわからないし、勉強も満足にできない。どこか命を失くす心配をしないで済む所で暮らしたい」と、よく言っていました。青年たちは特に、その村の軍隊に徴兵されて戦争に駆り出されることを恐れていました。

そのように自分の乗物を乗り換えたいと願うカンブチア人たちは、不法にタイ領内に侵入し、国境からわずか何キロメートルかしか離れていないカオイダン難民キャンプに潜り込もうとします。そのキャンプの不法居住者として食糧の配給は受けられなくても、彼らはアメリカ合州国やカナダなどの第3国に行ける希望をつなごうとします。

カンブチア人同士の対立

1985年4月、私はそのカオイダン難民キャンプでJVCの西崎憲司記念技術学校のプロジェクトに参加しました。この学校が抱えていた一番大きな内面的問題は、一緒に働くカンブチア人同士の対立でした。その対立の原因は、都市住民と農村住民との伝統的な関係にもあるのですが、ほとんどが1970年代初頭からのベトナム戦争のカンブチア国内への拡大と、中国の支援を受けたクメールルージュによる1975年の政権の奪取、それに続く1979年までの大虐殺を伴った恐怖政治の中での社会様式の非人間化の結果にあると言えます。彼らはみんな同じ国に住んでいたのですが、おそらく全く別なお互いに対立し合う乗物に乗っていたのでしょう。その対立の関係が、人口わずか2万数千人のこの難民キャンプの中での集団生活を通して、未だに続いているのです。

日本に一時帰国した際に、新しいTシャツを70枚位もらい受けて、それをカオイダン難民キャンプへ持ち帰りました。レッドバーナというノルウェーの

団体がそこで社会福祉活動のプロジェクトを行っており、私はその団体を通して難民キャンプの中で一番貧しい人たちにそれらのT シャツを配ってもらうことにしました。難民キャンプという非常に不安定な乗物の中で、さらにより弱い立場におかれている人たちを見分けたいというのが私の気持ちでした。そういったより弱い立場におかれている人々に照準を合わせて、技術学校という枠を越えて何らかの働きかけができないものだろうか、私は10カ月間に渡る活動の中で模索を繰り返してきました。そのための準備として、私たちの技術学校の1986年1月卒業生・進級生計645人を対象にアンケートをとりました。その結果を集めることにより、彼らの全体像が具体的に見えてきました。その中で特に重要だと思ったのは、彼らの約37%の人達の出身地は、現在戦場となっているだろう国境の向こう側のバードムボン(バットンバン)省だったということです。戦場に近い彼らの故郷は、難民キャンプよりもさらに不安定な乗物です。

対等の関係

1986年1月、カオイダンの技術学校の卒業式を終えた数日後、私はJVCの熊岡路矢さんと一緒にカンブチアの首都プノンペンへと飛びました。

運輸省で働いているサメットさんが、空港の玄関から最初に手を振ってきました。彼は、これでもう4回目のプノンペン訪問になった熊岡さんとは、すっかり顔馴染みでした。カンブチアの人々と数年間に渡ってつき合ってきた私でしたが、彼には今まで会ったどの人にもなかった活力を感じました。720万人という人口を抱えたカンブチアという乗物の舵取りの役目に、彼は少なからず貢献しているという自信があるのでしょう。

ベトナム戦争とポル・ポト政権下の政策により、物理的にも精神的にも大きな損傷を負ったカンブチア。

タイ、カンブチア国境からカンブチア国内を望んだ時は、地の果てのように見えたものです。しかしながら、実際にこうして来てみると、難民たちの乗物よりはるかに実体のある「カンブチア人の乗物」という感じがしました。

2週間のプノンペン滞在を終えてホーチミンに向かう飛行機の中で、これからインドに研修に行こうとするカンブチアの外務省の初老の男性と同席しました。彼は英語を話さず、私はフランス語を話さな

いため、必然的に共通語はクメール語(カンブチア語)となりました。拙いクメール語で私は話しかけ、彼の年齢や出身地、家族のことなどを尋ねました。彼は、当然のことながら、数十歳も若い私におもねるようなことはしませんでした。彼の表情は、国境や難民キャンプにいるカンブチア人たちのそれとは全く違っていました。国境や難民キャンプのカンブチア人たちが、私たちに規則で禁じられているのを承知の上で、肉や野菜やボールペンや英語の辞書などを買ってきてほしいと請う時の、恒久的な依存を請い続けなければならない運命を恥ずかしく思い、その恥ずかしさにさえ慣れてしまった、そういった表情とは全く違っていました。そこから、まず彼と私の間で、1番快い関係としての平等というものが成し遂げられるような気がしました。

それぞれの乗り物に乗って

カンブチア人たちは、それぞれがそれぞれの乗り物の上で精一杯生きようとしています。けれども、家族や親戚や友人が決して同じ乗物に乗っているわけではないのは、悲劇としか言いようがありません。

「日本人の2人の恩師とその家族にもう1度会いたいものです」と、私たちがこれからプノンペンで開始するワークショップ・技術学校に協力してくれるトラック輸送会社のカンさんが語ってくれました。十何年か前にプノンペンに自動車修理技術を教えに来ていた日本人の人たちを懐しんでいるのです。それは、「あなたは日本に今何を望みますか」という私の質問に対しての彼の答えでした。

1986年2月、私は日本に帰国しました。それから約1カ月ほど経ったある日、CCC(カンボディアン・カルチャー・クラブ)の創立1周年記念パーティの席上で、3年ぶりにビチュット君とベアスナーちゃんに出会いました。ビチュット君は私より背が高くなり、スーツを着こなしていました。彼はこれから中学3年生になるところでした。ベアスナーちゃんは高校入試に無事合格し、卒業式が目前に迫っていました。彼らの元気さと驚くばかりの成長の速さは、本当に眩しいばかりでした。彼らはクメール語の読み書きはうまくできないのですが、いつか彼らがもう1度カンブチアの土を踏むことができる、そんな時代が夢であってはいけないと思います。そのためには、私たちこそが今大きな役割を果たすべきではないでしょうか。

Dear, My Friend

出会ったこと、思うこと

考えさせられた本、映画……について

原稿、お待ちしております（1000字ぐらい）

ETV8—開発問題を考える

吉 武 保 子

NHK教育テレビの「ETV8—開発問題を考える」という番組については、先月のJVCニュースに掲載しましたが、もう少し内容を詳しく述べ、感想をつけ加えたいと思います。

今の日本のODAのあり方は、政府の感覚がズレているから起こってくるばかりのものではないと思います。私達も海外協力を頭で理解していても、皮膚感覚で実感することは薄いのではないのでしょうか。世の中の動きとしてはわかるけれど、さて自分の生活とどう関わっているかはよくわからない。同情はするし、熱い心は持っているし本人は思っているが、日本にも責任があるという意識は欠けているというのが一般的のように思われます。

世界の感覚に今だ馴染めず、意識が外に向かって突き進んでいかない分、自分の中にはね返らせていけないのだと思うのです。こうした感覚だからこそ、私達の政府のやり方に対しても無責任なまま関心を払わず、追求も要求もしない形になって来てしまったのではないのでしょうか。このことは第二夜に話されていたNGOの問題点とも全部つながってくるのは当然でしょう。

NGO側としてはJVC、シャプラニール、アジア学院の代表がそれぞれ話をされましたが、JVCの星野事務局長は、NGOの存在や活動を90%の人が知らないという日本の中での資金集めの苦労ばかりでなく、まわりの無理解からくる人材確保の難しさについても話をされました。そしてシャプラニールの大橋さんの「劇的効果があるというわけでもない息の長い活動に対して、受け入れてくれるような社会に（日本は）なって欲しい」という言葉や、アジア学院の高見氏の「一緒に喜んで、一緒に食を分かち合うことは、人間がわかり合えること、将来に希望が持てることです」という言葉は、どのNGOの人達も同じように感じていることなのだろうと思って聞きました。

番組のおしまいの方では、これからの学校教育の

中で社会開発教育などもとり入れて欲しいこと、信頼関係が大切である政府とNGOの対話を増やして欲しいこと、政府と対等な関係になるためにも今年あたりNGOの連合の動きが出て欲しいことなど、具体的で建設的な意見が述べられていました。とにかく今までのように、日本のために世界とどうやってつき合っていくかという感覚ではなしに、これからは世界のための日本という感想が各出席者から出ていました。そうした考えを広めていくためにも、まずNGOは、もっと気楽にテレビに写った方が効果的ではないだろうかとその日のテレビを観て思いました。百万遍の言葉を連ねるよりも、テレビは一瞬にして雰囲気伝えてしまいます。実際星野さんのインタビューの後ろに見える事務所の様子は、広々としていつもより立派に見えた気もしないではありませんでした。スタッフやボランティアが皆生き生きとしていて、活気に溢れているように見えました。これで少なくとも知らない人にもNGOをちょっとは身近なものとして感じてもらうことが出来たのではないのでしょうか。もちろんテレビで第三世界やNGOがとりあげられることはあまりないので、物珍しさや同情など少々片寄ったとられ方をすることは時々あると思います。が、まず人々の目の中に入り込むということは大切なことではないでしょうか。

さてテレビの効果に期待したことを言いましたが、期待ついでに少し注文もあります。開発問題をとりあげるのなら、やはり“考える”だけではなく、次は私たちの生活をとりまく様々なことと関連づけて理解出来るような番組を続編で出してもらいたいと思います。世界のとらえ方やその人の暮らし方にまで影響を与えるような番組をとということです。それは番組でもとりあげられていたオランダのNOVIBの「食卓の客への貯金箱」の主旨とまさに同じことなのです。ただお金を集めるだけではなく、いつも「もう一人の友達」のことを忘れることなく、毎日のいろいろな生活のしかたをふり返って、そして具体的に考えてみようというあの運動。そのねらいと同じように、身近なところから考えられるような番組を次に期待しています。

また増えた失敗談

熊木政江

私ってどうしてこう失敗ばかりなんだろう。失敗の数と質では決して人にひけをとらないな。数え上げたらキリないんだけど、数ある中から一つ、一番最近のまだ人に御披露していないホヤホヤのやつを紹介します。

あれは私が悪いんじゃない。雨がいけないんだ。昼間っから雨なんか降るな。

5月22日(木)、ヴィッサー・カーンヴウッチャーとかいう仏教の休みのため、カオイダン・チームはその日はお仕事はお休み。私もふだんだったら寝てるんだけど、その日はキャンプの中の大工さん、Mr.ヘーンに用があって朝からはりきって一人で出かけたのでした。セクション21に彼の家はあって、そこは共同で使うおトイレのすぐ近く。そういうの私は全然平気。おトイレの側に車を止めて、「ソックサバァーイ、テー?(元気ですか)」と彼の家にそそくさとお入っていったのでした。少し話をした後、クメール風ヌードルをごちそうになりました。そして「チュガーン、チュガーン(おいしい、おいしい)」と、1時ごろそこをおいとしましたのでした。おそばを食べている時雨がゴーンと降っているの、実は気がついていたんだよね。でも別に何も考えず、ひたすらおいしいおそばにありついていたな、そういえば。

ところが雨もそろそろやんだ頃、外に出てみるとすごいぬかるみ。わあこれじゃ前にも後ろにも行けないや。それにおトイレのすぐ近くだから、へたして車をおつけちゃったりしたら、おトイレも車もたいへん。うまくやんなきゃ。

せーの、ブーン、ブーンとエンジンをふかせて、気をつけて、気をつけて、と。あっ、トイレにおぶつかる……よけた…と思ったところが大きな水たまり。ドビシャン!! どうやってここを出よう。気がついてまわりを見ると、皆、各々の家から出てきて見ている始末。「オラオラ、見せ物じゃないんだよ」なんて言いたかったけれど、そんなこと言えないし、「へへへ……」と頭をかくと、皆、私を見て笑っている。こっちはね、真剣なんだ!

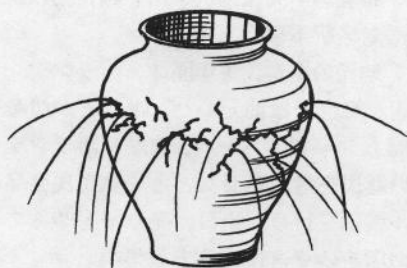
おっ若いクメールのお兄さん、手伝ってくれないかなあ。向こうもわかったらしくて、友だち2-3人と手伝ってくれる。2人が後ろを押して、1人が前で合図する。なんとか少し進んだ。でもこれから

どうするの?とっていると、1人のお兄さんが後ろに行って、方向転換すればいいと合図してくれる。「あったまいい!なーるほど」と感心していると、クメールのお兄さんたちは今度は前から押そうとしている。ごめん、ごめん、あまり感心している場合ではなかった。よしよし今度は後ろか。後ろにまわったお兄さんが「バック、バック」と英語で教えてくれる。よしいいぞ。うまく進んでいるぞ。だけどこのお兄さん、車と道ばかり見てて実は何か見落としてたんですよ。

水ガメ。「バック……」の声のままに少しづつさかかっていき……カッチャン!! 一瞬大勢の人のおしゃべりもやみ、しーんと。「えっ何?」1秒もしないうちなんだけど、今度はシャーという音が。クメールの家の1つの水ガメをわってしまったのでした。「やっちゃった!!まずい!!」それにしても、図のようにちょうど真ん中へんに入ったヒビの部分から出てくる水は、なんというか、美しいものでした。シャーッと、まるで噴水を見るような。

まずい、見とれてなんかいられやしない。まわりはまたザワザワ、ワサワサ……皆こっちを見てる。えっと、えっと、そうだ。まずこの水ガメの持ち主にあやまんなくちゃ。家の中に入っていくと、若い美しい女の人だけど、なんか恐そうだなあ……。「ご、ごめん、ソムトッ、えっと」。

どうにかこうにか許してもらえた。よかったあ。でもUNHCRに詫び状を書いて、水ガメ1個もらいにいかなきゃ。あーあ、私っていつもこんな後始末ばかりしている。失敗さえしなければ仕事が2つも3つも減るのに。そうしたら、どんなにか楽だろう、と思うけど、でも明日になればこんな反省も忘れ、また失敗の花を咲かせていることだろう。自分でもどんなことしでかすか、ちょっと楽しみ。いけない、いけない。きちんと反省はしているんですよ。私なりに。



6月の動き

《初夏はよいよい東金バスツアー！》

去る6月14日(土)、15日(日)の両日、千葉県東金市の山武ボランティア協会とJVC/曹洞宗ボランティア会/シャプラニール/カンボジア・カルチャー・クラブの合同企画でバスツアーが実現。定住難民、留学生、日本人含めて約11カ国、140名近い人達と東金市の市民、地元企業、各国航空会社、風の学校、東金ユネスコ協会、東金ロータリークラブなど約100名近い人達が交流する機会をもった。翌日が千葉県民の日ということもあって、前夜祭の14日(土)は午後6時半から「田舎(いなか)るちあ・サンバ大会」の名のもとに各民族舞踊、サンバが披露され、用意された中央公民館ホールは音楽にあわせて踊る人、はしゃぎまわる子供達で大にぎわいとなった。

大パーティも終る頃、2~3名のグループとなって東金市の各家庭へ、一晚ホームスティすることとなった。地域の人には、第三世界の問題や在日する外国人と身近に接する機会となり、在日する外国人にとっては、都市生活以外の日本の姿を知る機会となった。また、各団体、各民族の交流もあり、いろ

いろな実りをもたらした。翌日、昼、集合場所となった広場では、トマトなどのおみやげを手に、記念撮影したりする光景が見受けられた。夏休みに遊びにくる約束をした人も多く、打ちとけた様子に理屈ではない交流の姿をみた思いがした。

しかし反省点もいくつか見られた。バスの手配がうまくいかなかったり、宿泊施設が足りなくなって、ボランティアが飲み屋で雑魚寝をしてしまったことである。またホームスティをする上で、事情がのみ込めずにいた家族もあったので次回、やる機会があれば、十分な準備と事前のオリエンテーションが必要かと思う。

まずは、誌面をお借りして、関係者の労に対して感謝の意を表したいと思えます、お疲れ様でした。(森山)



《国際平和年に参加しよう》

昨年の国際青年年に引き続き、今年は国際平和年になっている。

国内活動が、今ひとつ盛りあがらないJVCも各自自治体の各種イベントに参加することが決まった。一人一人の主体的な、そして気軽な参加を待ちます。当日、会場に顔みせだけでも結構ですから、ぜひどうぞ！ Welcome！

● 海老名市青年の祭典

日時：7月19日(土)、20日(日)

場所：海老名中央公園(小田急線、相鉄線とも海老名駅下車)

内容：地元の企業、青年団体、ボランティア団体が出店。舞台では地元のバンドなどが演奏を行う。JVCは、シャプラニール、曹洞宗ボランティア会、幼ない難民を考える会などと一緒に民芸品の販売、パネル展示を行う。当日、売り子をやって下さる方、お店をのぞきに來る方募集中。

昨年は、雨にたたられて、うんざり気分の出店で

したが、今年は売り場も会場の前面に出ててんでこまいなることを期待しつつ……

● かながわ国際平和年フェスティバル

日時：8月2日(土) 13:00~21:00

3日(日) 10:00~21:00

場所：大通り公園、横浜市技能文化会館(国鉄関内駅、地下鉄伊勢佐木長駅下車)

内容：パレード、民族芸能、コンサート等、また、両日を通じて衣食住の生活の基本要素から平和を考えるための“ワークショップ”や平和を考える“フィルムフォーラム”、あるいは平和の絵本の展示及び即売など多彩な催し物の企画を予定。

JVCは「Happiness in the world」と題して、パントマイムで第三世界や難民の問題を表現したいと思っている。またインドシナ各国の踊りや、高校生バンドも舞台上で演奏などなど。

お祭りとは言いながら内容の濃い企画。家族連れで、きてみてね。(森山)

《動きだしたJAST》

JAST(国境なき農業者集団)が国内でも行動を開始しました。土に根ざした行動を中心に地域社会づくりを目指している人々と、ネットワークを結んでいこうという考えのもとに、6月7日新潟の長岡市で「難民救援チャリティーバザー」を行ってきました。これはJASTの団体会員である上越市の「緑と文化を育てる会」の協力でインパチェンスなどの花や木を仕入れて販売したものです。上越市は東京からはちょっと遠いのですが、これからもソマリアの報告会やパネル展、講演会などを開いていくそうです。

広報活動としては、『JAST・TIME』を毎月発行する予定で準備が進んでいます。ソマリアの農場で活動する会員のレポートを中心に、土に関する記事やお知らせなどが載ります。

さてそのソマリアでは、2月に10アールの農場を開墾しました。そこにインゲン豆、ソラ豆、カボチャ、中国野菜(パイラム、サイシン)、落花生の種を蒔きました。土地の人が食べるトウモロコシは土を荒らすため、連作がきかないからです。あちらで育ちそうなもの、ソマリアの人が食べそうなもの、栄養のあるものということで、いろいろと試している段階です。中国野菜のサイシンなどとてもビタミンが多いので、ビタミン不足の土地の人に良いかもしれません。その他砂漠のハウレン草と言われているモロヘイヤの種も、次回試してみるそうです。小さな小さな種ですが、緑を凝縮したような濃い色です。在来種なのでうまく育てば次々子孫を増やしていくというなにか頼もしいような種でした。その種を



船川秀夫さん



南部良一さん

持って6月28日船川さんがソマリアに渡りました。「農業は生活の基本だと思う。日本の農業は暗いが食物を作る喜びは大きいはず。その喜びをソマリアの難民と分かち合えたらいい」と船川さん。一年間の予定で行って来ます。そして南部さんも東京農大の一年生ながら7月12日にソマリアへ。これに先立ち船川さんは出身地埼玉の新聞に載ったなかで、カンパを呼びかけました。そして卒業校の幸手東中学校生徒会から募金を寄せていただきました。南部さんは出身地の福井の新聞に載りました。ここでも「南部さんを支える会」が出来ました。しばらく国内に残る井本さんは南部さんと一緒に福井の鯖江市に行き、JASTの説明、パネル展、バザー等を行うなどPR活動をしてネットワークづくりを進めています。どうも裏日本方面からのようですがJASTの活動は少しずつ根を広げようとしています。(吉武)

《まんが博でグリーン・フォー・アフリカ》

国鉄大阪駅に近い西梅田の“キャッツ”跡地で7月19日から8月31日までの夏休みの期間中「まんが博」が開かれる。これに日本漫画家協会がJVCのグリーン・フォー・アフリカキャンペーン参同のまんがを展示する。現在続々と各漫画家からはがきに描かれたまんがが協会に届いている。

JVCもこの場所を借りてエチオピアのパネルを展示したり、バンダナやTシャツを販売する予定。



JVCのスタッフを募集しています

応募条件: 18歳以上の健康な青年、一年以上継続して活動できること。

応募方法: 履歴書と志望動機についての作文(2000字程)を郵送のこと。書類選考のうえ、面接と簡単な語学テストを行って、結果は郵送でお知らせします。

待遇: 渡航費など当初の必要経費、最低生活費保障

募集期日: 常時募集中、3カ月ごとに選考。

郵送先: JVC(日本国際ボランティアセンター)
〒113東京都文京区湯島3-1-4
会田ビル5階(03-834-2388)

JVCプロジェクト

1986年6月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>涉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行</p> <p>JVC説明会 - 毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時 学習会 第4月曜日 午後6時～9時</p>	全国社会福祉協議会	<p>岩崎駿介 (代表)</p> <p>星野昌子 (事務局長)</p> <p>柴田久史, 佐々木志保 加納 妙, 前川昌代 佐久間典子, 古西 勇 他15人</p>
日本国内	<p>●日本語家庭教師</p> <p>活動評価表の集計は定住難民編と活動者編に分けた。そのうち定住難民者編は終了。活動を休止していた間も定住者や活動者から問い合わせが相ついだ。7月から各地域の定住者, 活動者の協力を得て, 新たなリクルート活動を行いたい。</p> <p>6月1日から落合正幸が準スタッフとして活動を始めた。機関誌『そんぼつ』を毎月発行している。</p>	ジャパン・タイムズ	森山久寿子, 落合正幸 地区連絡係11人 他約70人
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●農業による自立促進 / 定住 自立促進</p> <p>ヘーガン農場を5ha拡張した。</p> <p>農業クラスを5回実施。地力の低下, 疲弊化などで耕作状況がハルガン農場では7割にとどまっている。</p> <p>定住</p> <p>農民とのミーティングを聞き, キャンプから農場近くへ移り住むことについて話し合う。家のほかにぜひモスクがほしいとのこと。</p>	<p>UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 創価学会文化, 平和運動事務局 ジャパン・タイムズ</p>	<p>嶋 紀晶 (ソマリア事務所 長), 山口誠史, 鶴田三芳 中川正憲, 荻ノ迫善六 柿原建三, 五十嵐裕昌 法橋 亮, 庄司 美 J・バークマン, モハメッ ド, ラシッド, アオキ, アハメッド, シアッド, ソフィア, シェイクアブディ</p>
マグドール・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●医療・保健 / 補助給食</p> <p>ELU/CAREの食糧配給が行われていないために, 補助給食配給対象の子供の登録者数が100人を超えた。</p>	<p>朝日新聞厚生文化事業団 モラロジーMIRC 仏国土をつくろう会</p>	<p>掛村 均, 樫田秀樹 米澤 聡, 石井弘代 中路美和子, 千田悦子 シュクリ, ハッサン, アブディ, フセイン</p>
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	<p>●医療・保健 / 補助給食</p> <p>マグドールでの補助給食の結果を知るために身長と体重の測定をした。個別トイレの作成が進行中。</p> <p>●植林</p> <p>ルシナの苗木1348本がすっかりリスに食べられてしまった。</p>	<p>砂漠に種をまく人の会</p>	
エチオピア (ウォロ州)	<p>●総合的復興促進</p> <p>植林や土壌保全のため44haのテラシングが完了。苗木が若すぎるため本格的植林は行えないが, 試験的に1万本植える。またフード・フォー・ワーク用食糧のためなどの倉庫も建設が終わる。</p> <p>一方JVCと地域農民組織によって種子銀行が設立され, このための種子, 役牛の準備を進めている。</p>	<p>朝日新聞厚生文化事業団 立正佼成会 CRDA BAND-AID 西本願寺 モラロジーMIRC</p>	<p>内山田 康, 林 達雄 伊藤達男, 伊藤幸子 内藤のぞみ</p>
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (バターン・プロセス シング・センター)	<p>●国際移民委員会 (ICM) - 第三国定住手続きにともなう医療業務</p>	城西病院	青井千恵

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー, 古本のセール。 季刊『ニュース・レター』(英語・タイ語) 発行	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン, カモン・ミンムアン 斎藤美香代, 他約10人
カオイタン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 現在キャンプには1万4280人のKDカード, 4297人のFCカード, 7202人のRCカード所持者がいる。今まではKDカード所持者だけに第三国定住の機会が与えられていたが, UNHCRからFCカード所持者に対しても正式に第三国定住の許可がおりた。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 妙心寺派宗務所 花園会	熊木政江, 谷山博史 トンディー・ソムカネ ソムヨット・ラタナタム
国境のサイト2, ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食費 ナムユン・キャンプより約1600人が6月6日到着。JVCはUNBROの要請を受け, ナムユンの人々に対し, 711kgの野菜を7週間配ることになった。またナムユンの3歳以下の幼児と妊産婦330人に対しても, ドライパックの配給を始めた。	WFP/UNBRO	テリース, ブーム, トンチャイ 蓮尾慶治, 仲田奈々子 ソムボン, スピチャ, エンドリアン, ソムサック スリベン
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎(読み, 書き, 聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深める。 ●子供レクリエーション・プログラム ペーパークラフト, リズム音楽, 集団ゲームなど。	天理教千葉	浜崎妙子, 大場きみよ アナン・プッタミリンパティ
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 スラム在住児童が小学校(6年間)を卒業できるよう援助している。本年度の対象者は10のスラムで16校250人。 ●クロントイ図書館 クロントイスラム住民, 就学前児童から成人までを対象としている。新図書館建設のため, NHA(住宅公社)と交渉中。 ●移動図書 クロントイ以外の10のスラムで子供向け図書を中心に回覧予定。 ●移動学習センター(プラテープ財団, FFSC, JSRCとの共同プロジェクト) 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育を行っている。	モラロジーMIRC NTV, JOFIC 庭野平和財団 聖ヨゼフ老人ホーム 京都国際青年委員会	ヴァラナット・チュンクル, サムルエイ・ジョンヨー クラン, アルニー・プロマ, リーラ・クンナロン, スワン・リムサンベン, コメン・スグワン 佐藤正喜
カンブチア (プノンベン)	●カンブチアの人々への総合的人道援助 5月1日より15日まで, プレイベン省バプノム郡での井戸掘り活動に参加し, プノンベン市内第4孤児院の水田のための給水ポンプを設置した。ワークショップ/技術学校については, 建設に必要な材料を注文する段階。	日本青年会議所 関東地区協議会, 全国老人クラブ 連合会 モラロジーMIRC	熊岡路矢, 簗田健一

